



令和6年12月24日

岩倉市議会
議長 関 戸 郁 文 様

会 派 名 創政会
代表者名 須 藤 智 子

第86回全国都市問題会議—健康づくりとまちづくり—
～市民の一生に寄り添う都市政策～
報告書

このことについて、下記のとおり実施しましたので報告いたします。

記

- 1 実施日 令和6年10月17日（木）～18日（金）
- 2 研修先 姫路市文化コンベンションセンター（アクリエひめじ）
- 3 出席人数及び氏名

2名	関戸郁文	伊藤隆信

- 4 復命事項
別紙のとおり

第 86 回全国都市問題会議報告書（創政会）

作成者：関戸 郁文

- 【開催日程】令和 6 年（2024）年 10 月 17 日（木）・18 日（金）
- 【場 所】姫路市文化コンベンションセンター（アクリエひめじ）
- 【参加者】関戸郁文 伊藤隆信
- 【主な内容】

議題：健康づくりとまちづくり

【第 1 日 2024 年 10 月 17 日（木）】

○基調講演

生命を捉えなおす

-動的平衡の視点から-

福岡伸一 氏（生物学者・青山学院大学教授）

令和 6 年 10 月 17 日、福岡伸一氏（生物学者・青山学院大学教授）による基調講演「生命を捉えなおす -動的平衡の視点から-」を拝聴しました。本講演では、生命現象を「動的平衡」という独自の視点から捉え直す試みが語られました。その内容を以下に報告します。

■ 生命の流れとして捉える視点

福岡氏は、分子生物学に携わるきっかけとなった原体験として、子どものころに抱いた生命に対する疑問を挙げられました。特に、ルドルフ・シェーンハイマーの生命観「生命とは動的平衡にある流れである」という考え方に強く共鳴されたことが語られました。

動的平衡とは、絶え間ない流れの中でバランスが保たれた状態を指します。生命体は、構成成分が次々と分解・再構成されることで、そのバランスを維持しています。例えば、私たちの身体は、食べ物によって補給される栄養素が細胞と絶えず交換されており、一見変わらないように見える身体も、実際には常に変化し続けているのです。このような「変わらないために変わり続ける」というプロセスこそが、生命を支える本質であると述べられました。

■ 動的平衡の哲学的背景

さらに福岡氏は、アンリ・ベルクソンの生命理論に触れ、生命を「持続する流動」として捉える哲学的背景を紹介しました。

ベルクソンは、心と身体を「持続の緊張と弛緩の両極」に位置づけ、それらが相互に関わり合うことで生命のリズムを形成すると考えました。この哲学的視点は、福岡氏の生物学的考察に深い影響を与えたといえます。

■ 動的平衡の応用と示唆

福岡氏は、動的平衡の概念が生命現象だけでなく、地球環境の生態系や都市設計にも応用可能であると指摘しました。例えば、都市を設計する際には、創造だけでなく「壊すこと」や「自然に還すこと」を見越して設計すべきだという示唆がありました。この考え方は、現代社会が直面する環境問題の解決や持続可能な都市設計の一助となる可能性を秘めています。

■ 終わりに

福岡氏の講演は、生命という普遍的なテーマを科学と哲学の両面から深く掘り下げるものでした。「動的平衡」という視点は、私たちの生命観を刷新し、さらに広範な分野への応用可能性を示唆するものであり、大変刺激的でした。この考え方を日常生活や社会の課題にどう活かしていくか、私たち自身も考えを深めていく必要があると感じました。

以上、基調講演の報告(主報告)とさせていただきます。

○主報告

清元秀泰 氏 (姫路市長)

先日〔令和6年10月17日〕、姫路市文化コンベンションセンター(アクリアひめじ)において、「市民の『LIFE』(命・くらし・一生)を守り支える姫路の健康づくりとまちづくり」と題する清元秀泰市長の講演を拝聴しました。

本報告では、講演の要旨とその意義について記します。

■ 動的平衡とまちづくりの哲学

講演の冒頭、清元市長は「動的平衡」という概念に言及され、この考え方が地域社会や健康づくりにおいていかに重要であるかを力説されました。

ご自身の医師としてのご経験や、東日本大震災復興に携わられた中で感じた「変化と安定の調和」という動的平衡の理念に共感され、それが姫路市政にも大きく活かされているとのことでした。

特に、姫路城の修繕を「動的平衡的補修」の視点から語られた点は印象的でした。

古き良き文化を守りながら、時代の変化に対応して適応を図る姿勢が、姫路市のまちづくりの核となっていることが伺えました。

■ 健康づくりと地域活性化への挑戦

次に、清元市長は、健康づくりを推進することが地域の活性化や社会保障負担の軽減につながるという点を強調されました。

健康で生きがいのある暮らしは、介護や病気の予防につながるとともに、地域住民のつながりを強め、地域全体に活力を生み出す原動力となります。

姫路市では、この「いのちが輝くまち」を実現するため、市民が主体となる健康づくりの取り組みを積極的に進めており、市民一人ひとりの健康と地域の発展が両立する社会を目指されています。

■ 姫路市の具体的な健康づくり施策

講演では、姫路市が取り組む具体的な健康づくりの施策として、以下の4つの柱が紹介されました。

1. 市民による主体的な介護予防の促進

・ 軽度認知障害（MCI）の早期発見と予防に向けた支援や情報発信、個別相談の実施。

・ 子宮がん検診費用の無償化やゲノム検査の推進など、市民の健康を守るための具体的な施策を展開。

2. ウォーカブルなまちづくり

・ 居心地が良く歩きたくなる「ウォーカブルシティ」の実現に向け、大手前通りの「ほこみち」指定やイルミネーション事業を展開。

・ 日常的に歩くことを促進し、市民の健康づくりに寄与する取り組み。

3. ICTを活用した健康づくり

・ マイナンバーカードを活用した医療業務の迅速化や、市民の健康増進活動への参加を促す「ひめじポイント」制度の導入など、デジタル技術を駆使した施策。

4. 未来を担う子どもたちの成長支援

・ 「こどもの未来健康支援センターみらい」の設置をはじめ、プレコンセプションケア（妊娠前ケア）、電子母子手帳の導入、専用アプリの開発などを通じた子育て世代の支援を充実

■ 終わりに

講演を通じて、姫路市が「市民が主役」という理念のもと、市民の健康と地域の活性化を両立させる取り組みを精力的に進めていることを強く実感しました。

健康づくりの推進によって地域全体が元気になり、それがまちづくりの原動力となるという視点は、多くの自治体にとっても参考となるものです。

清元市長が掲げる「いのちが輝くまち」の実現に向けた先進的かつ着実な取り組みが、姫路市のさらなる発展に寄与することを心より期待申し上げます。

以上

○一般報告

谷口 守 氏（筑波大学システム情報系教授）

井崎義治 氏（流山市長）

畑 豊 氏（兵庫県立大学副学長）

【 講演報告 】

・ 演題：生き物から学ぶ健康なまちづくり

- ・講師：谷口 守 氏（筑波大学システム情報系教授）

令和6年10月17日、姫路市文化コンベンションセンター（アクリアひめじ）において、「生き物から学ぶ健康なまちづくり」と題する谷口守教授の講演を拝聴しました。

本講演では、生物学的視点から都市の構造や運営を捉える斬新な考え方と、健康的なまちづくりの要点が紹介されました。

以下、講演内容の要旨を報告いたします。

■ 生き物と都市の類似性

谷口教授は、「生き物と都市はよく似ている」という独自の視点から話を展開されました。

生物と都市は、成長、活動維持、新陳代謝、病気や怪我、老化、成人病、進化といった観点で捉えることができるといいます。たとえば、都市が「老化」や「ゾンビ化」する現象は、人口減少や空洞化によって活力を失った地域の姿を象徴しているとのことでした。

また、バイオミメティクス（生物模倣学）の考え方を取り入れた都市計画が目されており、自然界における生物の機能や構造を模倣して、都市の新たな活力を生み出す工夫が求められると述べられました。

■ 健康な都市づくりの基本

講演の中核をなすテーマは、「健康な都市づくりとは何か」という問いでした。

谷口教授は、都市そのものの健全性を高めるためには、「歩く習慣を持つ健康な市民」と「歩くことを誘発する都市の体質」の好循環が重要であると強調されました。

この好循環を生み出すことで、健康な市民と健全な都市が互いに支え合う仕組みが形成されます。

具体例として、姫路市のトランジットモールや、公共交通を含む「歩くまち」の構造が挙げられました。

また、隣接自治体と連携した都市計画や、コンパクトシティやウォーカービリティ（歩きやすさ）の概念が、健康的な都市づくりに不可欠であると解説されまし

た。

■ オーセンティックな都市の重要性

谷口教授は、「都市の擬態」についても言及されました。

都市が「オーセンティック（本物）」であること、つまりその地域独自の魅力を保ちつつ、自然体であることが、人々を惹きつける都市の条件であると説かれました。

特に、無個性で一様な都市開発は、結果として市民の外出や交流の意欲を低下させる原因となりかねません。

都市が「本物」であることが、出歩きたくなる、活力あるまちづくりの基盤であるとのお話は、非常に示唆に富むものでした。

■ 終わりに

谷口教授の講演は、生物学的視点から都市の在り方を見つめ直す新しいアプローチを提示し、従来の都市計画とは異なる多様な視点の重要性を改めて感じさせるものでした。

「生き物から学ぶ健康なまちづくり」というテーマのもと、市民一人ひとりの健康を基盤に、都市全体の活力を引き出す仕組みが必要であるという主張は、多くの自治体にとって有益な示唆となるはずです。

今後も、生物学的な発想を取り入れたまちづくりが、地域社会の新たな可能性を拓くことを期待するとともに、谷口教授のさらなるご活躍を心より祈念申し上げます。

以上

- ・ 演題：都市そのものを健康にする街づくり
～ストレスを軽減し、リフレッシュできるまちへ～
- ・ 講師：井崎義治 氏（流山市長）

令和6年10月17日、姫路市文化コンベンションセンター（アクリアひめじ）において、「都市そのものを健康にする街づくり」と題する井崎義治流山市長の講演を拝聴しました。

本講演では、1, 健康都市という考え方との出会い2, つくばエクスプレス沿線区画整理事業で失う緑を回復する方策3, 環境価値・景観価値を高める「グリーン

ンチェーン制度と認定制度」の要点が紹介されました。

以下、講演内容の要旨を報告いたします。

流山市では都市そのものを健康にするために、全ての政策に健康視点を取り入れ推進しかつ全ての市民がストレスを軽減しリフレッシュできる環境整備、施策を継続的にこなっている。市民の Well-being を実現することが市民の健康と幸せにつながると定義されている。

まさに大都市の近くにある街で大都市でのストレスを軽減することを目的とした街が必要とされているのでその政策は理解できる。岩倉市においてはすでに緑豊であり、また近隣に豊かなところも多く環境整備は整っているのではないと思われる。健康を政策にというところをその通りであるので岩倉市においても政策一つ一つに健康志向があるか注視したい。

流山市では新しい鉄道路線建設に伴い多くの緑が失われた。環境を取り戻すため様々な施策展開され効果が出てきている。健康とむすびついた施策の例でとても感銘を受けた。

以上

- ・ 演題：IT/AI の健康分野への適用例
～姫路市の健診データ分析と過少による誤嚥予防～
- ・ 講師：畑 豊 氏（兵庫県立大学副学長）

令和 6 年 10 月 17 日、姫路市文化コンベンションセンター（アクリアひめじ）において、「IT/AI の健康分野への適用例」と題する畑豊兵庫県立大学副学長の講演を拝聴しました。

本講演では、1, 2008～2012 年の姫路市の健康診断データを用いた解析について 2, AI による嚥下解析とその歌唱による誤嚥への挑戦の要点が紹介されました。

以下、講演内容の要旨を報告いたします。

1, 検診結果の解析は、まさに健康つくりとまちづくりを実行するため EVIDENCE として活用できる。同時にファジー値の表示は毎年の検診で悪くなっている程度が一目でわかる指標であり、個人の健康に関する motivation を高めることができる。

2, 嚥下機能維持のため合唱を取り入れた。合唱が機能維持に効果があることは実証実験で証明されこれをひろめることによって健康寿命を延ばす取り組みが

なされた。EVIDENCE に基づく施策の一つである。このような健康寿命を伸ばす施策が AI によって多く見いだせられ広がっていくことが期待されている。

岩倉市においても老人憩いの家などのカラオケ施設の老朽化が懸念されてる。健康寿命を延ばすことに効果のある施策はすべて検討の中に入れていくべきと考える。

以上

【第 2 日 2024 年 10 月 18 日（金）】

○パネルディスカッション

宮本太郎 氏（中央大学法学部教授）

三木崇弘 氏（高岡病院児童精神科医）

奥村圭子 氏（NPO 法人日本栄養パトネット理事長）

今井 敦 氏（茅野市長）

南出賢一 氏（泉大津市長）

- ・テーマ：健康づくりとまちづくり 市民の一生に寄り添う都市政策
- ・開催日：令和 6 年 10 月 18 日
- ・会場：姫路市文化コンベンションセンター（アクリエひめじ）

令和 6 年 10 月 18 日、「健康づくりとまちづくり ～市民の一生に寄り添う都市政策～」をテーマにしたパネルディスカッションが開催されました。市民の健康と都市のあり方を多角的に議論する場として、行政、医療、福祉、教育など、さまざまな分野からの貴重な意見が交わされました。以下に、その概要を報告いたします。

■ コーディネーター：宮本太郎 氏（中央大学法学部教授）

宮本氏は、ディスカッションの冒頭で「市民を巻き込みながら、AI や ICT を活用して質の高い医療資源を結びつけていくことが鍵である」と述べました。また、登壇者からの取り組み紹介の後、鋭い質問を通じて議論を深める役割を担い、各分野間の連携の重要性を際立たせる進行を行いました。

■ パネリストの取り組みと議論

①三木崇弘 氏（高岡病院児童精神科医）

三木氏は、心理社会的視点から現代の子どもの健康について問題提起をされました。虐待、ゲーム依存、不登校、自傷行為、そして自殺願望など、子どもた

ちが抱える深刻な課題に直面する日々の実践から、現代の社会が心理的にいかに不健全であるかを強調されました。

「子どもは未来の大人であり、まちづくりに貢献する市民です。そのためには、健全な環境で育つことが不可欠です」と述べ、教育、保健、福祉、医療の各部門の連携による支援体制の構築が重要であると提言されました。子どもたちが「吸い込まれるような場所」を作る前に、支えとなる環境を用意することが不可欠との具体例も示されました。

②奥村圭子 氏（日本栄養パトネット理事長）

奥村氏は、栄養面からの健康づくりを切り口とした「栄養パトロール事業」の実践について発表されました。この取り組みは、地域に潜む栄養問題を早期発見し、他職種と連携しながら住民一人ひとりの健康寿命を延ばすことを目的としています。

事業の具体的な流れとして、栄養問題の早期介入、社会資源の再構築、さらに対象者の生活全般に寄り添うアウトリーチの重要性が示されました。「新しい予算を求めるのではなく、既存の予算枠を最大限に活用する柔軟な姿勢」が成果の鍵となっている点は、非常に参考となるものでした。

③今井敦 氏（茅野市長）

今井市長は、「未来型『ゆい』で紡ぐ健康高原都市・茅野の構築」をテーマに、茅野市が進める地域包括ケアシステムの取り組みについて説明されました。

特に注目されたのは、1人の健康、社会インフラの健康、データの健康という3つの軸を掲げた独自のアプローチです。デジタル田園健康特区の指定を受けた茅野市は、電子母子手帳やオンデマンド交通システム「のらざあ」などを導入し、DX（デジタルトランスフォーメーション）を活用して都市機能の向上を目指しています。多自治体間の水平連携や国・県・市の垂直連携が今後の課題として示されました。

④南出賢一 氏（泉大津市長）

南出市長は、「未病予防対策先進都市」を目指した泉大津市の取り組みを発表されました。「アビリティ・タウン構想」のもと、市民共創と官民連携によるまちづくりを推進し、健康づくり推進条例を制定。特に注目すべき点として、健康状態の見える化、学びの場の充実、食育の推進、多様な選択肢の提供などが挙げ

られました。

また、「あしゆびプロジェクト」など、ユニークな取り組みにより、市民の健康意識を高める活動が紹介されました。「行政だけでなく、市民自身が共に取り組む姿勢が重要」とのメッセージは、多くの共感を得ました。

■ 総括と考察

本パネルディスカッションを通じ、健康づくりとまちづくりの連携がいかに重要であるかが改めて認識されました。市民の一生を見据えた都市政策には、医療、福祉、教育、行政の密接な連携が不可欠です。登壇者の方々が示された具体的な取り組み事例と実践知は、各地域で応用可能な貴重な知見となるものです。

特に、栄養や心理社会的支援、DXを活用した先進的な取り組みなど、健康というテーマを軸にしながら、多様な切り口から課題解決に挑む姿勢は、多くの自治体や関係機関にとって示唆に富む内容でありました。

最後に、各分野のリーダーが果たす役割の大きさと、市民を巻き込んだ共創の重要性を強調し、本報告を締めくくります。

以上